特集

司会の言葉

外　須美夫*

医療は患者を個別に扱う．患者の違いを考慮して医療がなされる．例えば，小児と大人の違いはあきらかであり，誰でもがそれを考慮に入れて医療行為をする．しかし，女性には生理があり妊娠し出産するという男性との大きな違いがあるにも関わらず，性の違いを考慮した医療が行われてきたかというと，限定された分野においてのみであり，全体としては細かい配慮がなされて来たとは言い難い．麻酔や手術においても性差が考慮されたり検討されたりするということは稀であった．手術中の出血に対して若い女性の方が男性に比べて耐容性や寛容性が大きいのではないかということを，個人的な経験として味わうことはあった．そんなとき，もしかしたら月経のため出血に対してプリコンディショニングされている影響ではないかと考えたりもしたが，それも勝手な想像の域を出ない．

最近になって性差の疾患発生率や予後に及ぼす影響についてあちこちで取りあげられるようになった．論文にも疾患や治療における性差の違いを検討したものが増えている．また，女性外来が話題にのぼり，実際に開設されている病院もある．今回の循環制御医学会学術集会の会長である公文先生は早くからこのテーマを取りあげ，ここにシンポジウムが組まれることになった．その司会に私と東京女子医大の岩出宗代先生が当てられた．本特集はその内容をまとめたものである．

循環器疾患における性差については心血管病変の発生に対する女性ホルモンの役割という観点から取りあげられることが多い．エストロゲンは心血管系に保護的に働くと考えられている．血管トーヌスや内皮細胞，血管平滑筋など血管構成細胞の動態調節へのエストロゲンの関与が指摘されている．

本特集では，手術や周術期管理の性差が検討されている．荻野氏は動脈硬化性疾患に対する冠動脈バイパス術や腹部大動脈瘤切除術を取りあげ，患者の特徴と手術成績を性差の観点から検討した．小川氏は急性心筋梗塞症の長期予後に対する性差の影響を検討した．荻野氏はさらに弁置換術患者の性差による特徴と手術成績をまとめた．阪田氏は頚動脈内膜中膜肥厚と遊離型外因系凝固インヒビターおよびtPAI-Iとの関係における性差を検討した．小澤氏は外傷性大量出血による周術期心停止患者の生存率に対する性差の影響を検討した．公文氏はα_2受容体アゴニストであるデクスメデトミジンの作用が性差でどのように異なるのかを述べている．

性差を考慮すると，やはり男性と女性の違いが浮かび上がってくる．こんなところにも性差があらわれてくるのかという驚きもある．ただこれらの違いがどのような機序で起きているのかは依然として不明なところも多い．これまで考慮されなかった性差を日々の臨床で意識することにより，画一的な医療ではなくより患者ごとのテーラーメイドの医療が可能になると期待される．

*北里大学医学部麻酔科

Presented by Medical*Online